

イタリアのジャズ・ピアニスト、ステファノ・ボラーニは2002年10月に『ボラーレ』、続いて12月に『黒と褐色の幻想』をリリースした。2作ともボラーニのレギュラー・トリオによる同じ時のローマ録音で、日本のヴィナスレコードの制作。これがボラーニの日本初紹介となった。そのすぐ後で発表された2002年度のシングジャーナル主催《ジャズ・ディスク大賞》において、ボラーニは「新人賞」を獲得。2作連続のリリース、そして新人賞獲得という抜群のインパクトで、ボラーニは日本のジャズ・リスナーにその名を印象づけることになった。その記憶もまだ鮮明なうちに、こんどはヴィナス第3弾『愛の語らい』の登場である。内容はアントニオ・カルロス・ジョビン作品集で、2003年2月5～6日に同じくレギュラー・トリオでローマにて録音されている。

ピアノ・トリオによるジャズ&ボサノバ作品は、実は珍しい。ブラジルのボサノバ・トリオは除いて、ジャズ・アーティストのボサノバ集は、ボーカルかサクスが主役の録音が多い。ジャズのピアノ・トリオでも特に音楽上の問題は発生しないと思われるが、ボサノバといえば、ボーカルとギターとサクスというイメージが強いので、ピアノ・トリオ作品が少なくなっただけかもしれない。ボラーニのピアノ・トリオによるジョビン集は、そんなイメージを払底してくれる素晴らしい出来映えだ。彼らはジョビンを題材にして、自分たちのピアノ・トリオ・ジャズに見事にアダプトしており、ストレートアヘッド・ジャズ色の非常に濃いジョビン集に仕上げている。

その成功の大きな要因として、選曲に注目したい。ボラーニは、ボサノバ初期のナンバーから80年代の作品まで、実に幅広くジョビンの楽曲をとりあげている。そこが大きなポイントだ。ジョビンのボサノバ・ナンバーで有名な曲は、1950年代の末頃から60年代の前半に集中している。いわゆるボサノバ・ブームの時期にあたる。「イバナマの娘」「想いあふれて」「コルコバード」「ディサフィナード」など、有名なボサノバ曲は大抵ボサノバ全盛期に発表されている。ブラジルでは、1964年の軍事政権の樹立を境にして、音楽も大きな変化を遂げた。ボサノバに変わって、時代や世相を強く反映するMPB時代の到来だ。MPB以降、ジョビンはボサノバを作曲しなくなったわけではない。「波」「三月の雨」などの代表曲を発表しているが、ボサノバ・リズムを使用した楽曲は少なくなったのである。つまり、ボサノバ・スタイルやジャンルを超越して、“歌”を作曲するようになったといえば、わかりやすいだろう。野心的な音楽的チャレンジも数多く行なっている。また、元々、ジョビンはエコロジーや自然保護に強い関心を持っていた。70年代以降は、そんな思想を反映した楽曲も増えている。

ボラーニの選曲の幅広さは、ボサノバ・リズムにとわられずにジャズとして自由な発想の編曲とアドリブができる曲が多いことを示している。典型的なボサノバ/サンバ・ナンバーばかりを選曲していたら、このようにストレートアヘッド・ジャズ色の濃いジョビン作品集にはならなかっただろう。もちろん、ボラーニのように優れたジャズの才能と実力の持ち主でなければ、成立しなかったアルバムでもある。ボラーニのピアノ・トリオのメンバーは、3人とも多彩で幅広いジャンルで活躍している。1972年ミラノ生まれのボラーニは、ジャズをメインにして、クラシック、ポップ&ロック、舞台音楽など活動範囲が広い。1948年フェッラーラ生まれのベースのアレス・タヴォラッツィは、ア

<p><b>Falando De Amor</b> 愛の語らい</p> <p><b>Stefano Bollani Trio</b> ステファノ・ボラーニトリオ</p> <p>1. 愛の語らい Falando De Amor ( 3:41)</p> <p>2. 君なしではいられない Só Tinha De Ser Com Voce ( 5:19)</p> <p>3. アンジェラ Angela (4: 31)</p> <p>4. ルイーザ Luiza (4: 14)</p> <p>5. 白と黒のポートレイト Retrato Em Branco E Preto (4:17)</p> <p>6. おいしい水 Agua de Beber ( 5:05)</p> <p>7. ガブリエラ Tema Do Amor Por Gabriela ( 5:30)</p> <p>8. もっと愛の歌を Canção Do Amor Demais ( 3:54)</p> <p>9. 三月の雨 Aguas De Março (2: 23)</p> <p>10. ポイズ・エ Pois É (2: 48)</p> <p>11. ワン・ノート・サンバ Samba De Uma Nota Só (2: 45)</p> <p>【 All Songs by Antonio Carlos Jobim 】</p>	
<p>ステファノ・ボラーニ Stefano Bollani ( piano )</p> <p>アレス・タヴォラッツィ Ares Tavalozzi ( bass )</p> <p>ウォルター・パオリ Walter Paoli ( drums )</p> <p>録音：2003年2月5, 6日　ローマ</p>	
<p>©© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>	
<p>★</p>	
<p>Produced by Tetsuo Hara. Recorded at Studio Elettra in Italy on February 5 and 6 ,2003. Engineered by Emanuele Donnini, Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Front Cover And Artist Photos：Paolo Soriani. Artist Management：Mario Guidi. Designed by Taz.</p>	

バンギャルド&ジャズ・ロック・グループ“ AREA ”出身。経験豊富なベテランだ。ドラムのウォルター・パオリは、イタリアを訪れた米国ジャズの巨人たちと共演するなど、イタリアを代表するドラマーとして活躍している。近年、ヨーロッパのジャズが日本でも注目されている。日本でもすでに有名になったミュージシャンも多いが、ボラーニの登場はイタリアのジャズがクリエイティブな面でも十分に世界に通用するレベルにあることを教えてくれる。ボラーニは、ジャズ・シーンを切り拓くことのできるポテンシャルを持っていると思える。それでは、このジョビン作品を聴いていくことにしよう。

愛の語らい ( Falando de amor )

英語では「Speaking of love」と表記される1979年の曲。ジョビンは『ミウシャ&ジョビン』などでとりあげて、80年にリーダー・アルバム『テラ・ブラジリス』に収録。エディ・ヒギンズ・トリオのヴィナス作品『愛の語らい~ジョビン作品集』では、タイトル曲として収録されていた。ボラーニの演奏は、ピアノ・コンチェルトのような優雅な響きを奏でている。

君なしではいられない ( So tinha de ser com voce )

1964年の作品で、アロイージオ・チ・オリベイラが作詞。デオダートのブラジル時代のジョビン作品集『無意味な風景』、ジョビンの『コンボーザー~ベスト・オブ・アントニオ・カルロス・ジョビン』などで聴ける。ボサノバ全盛時代のボサノバらしい曲調だ。ボラーニ・トリオは、ボサノバ・リズムを採用している。

アンジェラ ( Angela )

1976年のジョビンのアルバム『ウルブ』に収録されたスローなナンバー。バラード風のメロディーとサンバ調のリズムを組み合わせる野心的な冒険を成功させた楽曲だ。ボラーニは原曲よりさらにテンポをスローにして演奏している。

ルイーザ ( Luiza )

ブラジルのTVシリーズのために1981年に作曲。ジョビンは主演女優のヴェラ・フィッシャーの美しさにインスピレーションを受けて作った。ジョビンのアルバムでは、『バスサリン』『エドゥ&トム』などで聴ける。ボラーニはブラジリアン・オペラ風の原曲をサッパリとしたシンプルで美しい曲調に変えている。

白と黒のポートレイト ( Retrato em branco e preto )

1965年発表のサウダージあふれる名曲。当初、曲名は「ジنگアロ」( Zingaro ) だった(『コンボーザー~ベスト・オブ・アントニオ・カルロス・ジョビン』に収録)。68年にシコ・ブアルキが歌詞を付けて、この曲名に変更された。ボラーニも叙情性豊かに演奏している。

おいしい水 ( Agua de beber )

1961年に発表されたサンバ調の人気曲。作詞はヴィニスウス。ジョビン自身は63年のアメリカ・デビュー作『イバナマの娘』に収録している。サンバ・リズムでライブを盛り上げる曲だ。ボラーニは素晴らしいジャズ・アレンジとアプローチを聴かせてくれる。

ガブリエラ ( Tema de amor de Gabriela )

ブラジル映画『Gabriela Cravo e Canela』(1983年)の主題歌。英語では「Theme of love for Gabriela」になる。ジョビン名義のサントラ盤『Gabriela』に収録。ジョビンの録音は明るく情熱的な曲調だ。ボラーニの演奏は、メランコリックなテイストを付け加えている。

もっと愛の歌を ( Cancao do amor demais )

エルゼッチ・カルドーゾのアルバム『カンサオン・ド・アモール・ヂマイス』(1958年)で発表された初期の名曲。エルゼッチのそのアルバムは、ジョビン(作曲)とヴィニシウス・ヂ・モライス(作詞)の共作集で、ジョアン・ジルベルトがギターで録音に参加した「想いあふれて」「オートラ・ヴェス」の2曲が、ボサノバ誕生の“出生届け”といわれている。その数か月後にジョアンの歌とギターで録音したシングル「想いあふれて」が、大ヒットして、空前のボサノバ・ブームが巻き起こった。

三月の雨 ( Aguas de marco )

ブラジルの三月は秋の始まり。その月に降る、夏の終わりを告げる土砂降りの雨を描いた名曲。作詞もジョビン。1972年に発表。代表的な録音は『エリス&ジョビン』『三月の水/ジョアン・ジルベルト』などがある。ボラーニはユーモラスなダンスを表現するようなアクセントを用いたユニークな編曲をみせている。

ポイズ・エ ( Pois e )

“ そのとおりだ ”( That's it ! ) という意味のこの曲は、1970年のシコ・ブアルキとの共作。『ばらに降る雨/ジョビン』『美しきボサノバのミューズ/ナラ・レオン』などで聴ける。この曲でもボラーニはリズムカルなジャズ・アレンジをみせている。

ワン・ノート・サンバ ( Samba de uma nota so )

1959年に発表された人気曲。ジョビンのアメリカ・デビュー作『イバナマの娘』、スタン・ゲッツ~チャーリー・バードの『ジャズ・サンバ』などに収録されて、アメリカでもすぐに人気を得た。ボラーニの自由自在なジャズ解釈が楽しめる。彼の優れたアドリブの実力と豊かな発想がよくわかる演奏だ。

( 高井信成 )